

---

報告者名	酒井 朋子	被調査者生年	1941年(男)
調査者名	酒井 朋子	被調査者属性	桂島区長
補助調査者	なし		

---

### はじめに

2012年9月7日、塩竈市浦戸桂島地区にて区長に面会し、話を聞かせていただいた。主な内容は津波による生業への影響や、避難所での生活の様子、桂島の主立った祭りなどである。

### 桂島の被災の概略・生業への影響

桂島には10メートルの津波が押し寄せ、島の南北をつなぐ坂を2メートルの高さで乗り越えて、反対側に到達した。太平洋側に面した海水浴場の近隣の住宅地に大きな被害があり、約30戸の家屋が流出した。

区長本人は震災のとき家にいた。地震を感じてすぐに、これはただごとではないと思った。塩竈市の防災無線が巨大津波警報を出した。区長は生まれてからずっと桂島に住んでいるが、その人生で初めてのことであった。この警報の直後に電気が切れて、無線も切れた。すぐに住民を避難させた。避難所で携帯ラジオを聞いていると、八戸何メートル、宮古何メートル、大船渡何メートル、とどんどん波が大きくなっていく。自分は住民の安全確保で忙しく、津波が到達した瞬間は見えていないが、他の人が「来たぞ来たぞ」と叫んでいるのを聞いた。「来た」などというのではなく、渦を巻いて押し寄せてくる、襲いかかってくるというような状態だったという。

海水浴場の近くには小島があり、昔は子どもたちが遊びで泳ぎに行っていた。その小島には一本松が立っていたのだが、今回の津波で流されてしまっている(写真1)。

桂島住民の主要な生業のひとつである養殖漁業には大きな被害があった。海苔と牡蠣の設備が大きく損壊した。牡蠣については、養殖のための資材などが軒並み流されたが、種(稚貝)を置いておいた場所(朴島近辺や野々島の北岸近辺)に津波被害が少なかったのが不幸中の幸いだった。ただ、被害が大きかったわりには2011年度の収穫はなかなかのもので、桂島は海苔も牡蠣も例年の6割に達した。宮城県でも有数ではないか。牡蠣の収穫作業は例年より1か月遅れてスタートしたが、実入りもよく、非常に粒が大きく、味もよかった。

### 避難所での様子

避難所は学校跡(旧浦戸第二小学校)を利用した。最大で220人くらいの人数がいた。さまざまな苦労があったが、毎朝その日の予定や、市や外への交渉事項の予定などを伝えて、不安が育たないように工夫した。

水にはあまり苦労しなかった。それぞれの家に井戸があり、それを使い水として使用できたことが大きい。ペットボトルの水は飲み水のためだけに利用できた。また食料は、浸水しなかった家の備蓄を区が買い上げた。離島なので普段から住民達がみな食料をたくさん買い込んでいる面があり、それが支援物資が来るまでに大きく役だった。ガソリンも海苔や牡蠣の養殖をやっている住民たちが普段からドラム缶で購入して備蓄しているのので、それを使って発電機を回すことができた。燃料についてもあまり心配はなかった。

困ったこととしては、まずトイレである。最初は外に穴を掘った。また毎朝、仮設トイレの中身を捨ててくるようなことも普段からすると慣れない作業だった。あまり話題に出ることがなく日常では考えもしないが重要な問題である。

ライフラインが復旧してからは避難所を離れて自宅に帰る人も多くなっていくが、そうすると今度は食料の問題

が出てきた。避難所にいるときは炊き出しで皆で食事をとっているが、自宅に戻ると自分で買い物をしなくてはならない。すると塩竈に出ることになるが、塩竈でも店が被災してほとんど閉まっていた。またマリゲートも閉まっているため、休めるところすらない。70、80代の高齢者が多い桂島住民にとっては辛いことである。これについては結局市にかけあって汽船が港に着いているあいだは早めに解放してもらって中で休めるようにした。思ってもみなかったさまざまな問題が出た。

### 桂島の夏祭り

今年で20回目になる桂島の夏祭りは、2012年はもちろん、震災直後の2011年にもおこなった。若い人たちの間で、こういう時だからこそやろうという声があがった。この夏祭りはお盆頃におこなうもので、出し物としては学校の子どもの太鼓叩きや、塩竈の高校のブラスバンド部の演奏、ビンゴ大会、盆踊りなどがあり、最後に花火が打ちあげられる。夏祭り実行委員会が組織している。2011年については、ふだん資金を提供してくれる塩竈の事業所なども被災していたため、チャリティ団体から支援をもらって実施することができた。大きな災害のあとに例年通りに夏祭りを実施できたことは、住民たちを元気づける出来事としてとても重要だった。

夏祭りのほかにも桂島には神社の例大祭があるが、夏祭りのほうが行事としては大規模で活気があるかもしれない。夏祭りは外向けで、例大祭は内向けの行事である。夏祭りのときには島の外から数百人規模で見物客が来る。

### 島の今後について

以前はボランティアもたくさん来ていたが、数も少なくなってきているし、ニーズも変わってきている。現在必要とされているのは、地域の将来をどうしていったらいいのかということと一緒に考えてアイデアを出し、長期的に動いてくれる人。なかなか難しい。もちろん、本来は住民たちが自分で動かなければならない。住民たちの高齢化が進み、限界集落化しているため、将来をどう考えるのかという問題はある。たとえば老人施設を浦戸や桂島に作るということは、若い世代にとって魅力的に映る提案なのかどうか。子どもの意見も引き出して行かなくてはならない。

防潮堤は難しい問題でもある。財産や生命を守ってくれるものであるいっぽう、100年に一度の災害のために海がまったく見えなくなってしまうのはどうか、という声もある。



写真1 一本松が流された小島



写真2 区長自宅の壁にかけられていた桂島浸水域航空写真